

『黒澤明の映画 喧々囂々——同時代批評を読む』

(2021年1月18日 初版第1刷発行 ISBN978-4-8460-2003-3)

正誤／訂正表

凡例

① (誤) の欄の赤字下線の部分は、(正) の欄では削除または訂正されている部分であることを示す。

② (正) の欄の黒字下線の部分は、訂正した部分であることを示す。

頁	箇所	誤	正
27	2行目	実在の嘉納治五郎と西郷四郎をモデルにとした、 <u>柔術各派から技を選び、</u>	実在の嘉納治五郎と西郷四郎をモデルに、柔術各派から技を選び、
137	11-12行目	文人 <u>たち</u> と云えば、『 <u>野良犬</u> 』評で <u>重い問題を投げかけた</u> 作家の椎名麟三は、シナリオを読んで「『生きる』のリアリズム——黒澤作品に現れた人間像」(『映画評論』(一九五二年十月号))	文人と云えば、『 <u>どん底</u> 』評でも言及している作家の椎名麟三は、シナリオを読んで「『生きる』のリアリズム——黒澤作品に現れた人間像」(『映画評論』一九五二年十月号))
179	2-6行目	<u>秋月</u> 家に敗れた <u>山名</u> 家の領地が混乱し、落ち武者狩りに巻き込まれた二人の百姓、太平(千秋実)と七(藤原釜足)は右往左往する。 <u>山名</u> 家の世継ぎ雪姫(上原美佐)は逃亡し、 <u>秋月</u> 側から懸賞金が懸けられ探索が始まる。二人の百姓は <u>山名</u> 家が隠した軍資金発掘の強制労働から脱走、国境を越えるべく岩の多い山間へ向かう途中、金の延べ棒を見つけ、そこで謎の男につかまってしまう。この男こそ、 <u>山名</u> 家再興を目指して雪姫と軍資金を守る、侍大将の真壁六郎太(三船敏郎)だった。	<u>山名</u> 家に敗れた <u>秋月</u> 家の領地が混乱し、落ち武者狩りに巻き込まれた二人の百姓、太平(千秋実)と七(藤原釜足)は右往左往する。 <u>秋月</u> 家の世継ぎ雪姫(上原美佐)は逃亡し、 <u>山名</u> 側から懸賞金が懸けられ探索が始まる。二人の百姓は <u>秋月</u> 家が隠した軍資金発掘の強制労働から脱走、国境を越えるべく岩の多い山間へ向かう途中、金の延べ棒を見つけ、そこで謎の男につかまってしまう。この男こそ、 <u>秋月</u> 家再興を目指して雪姫と軍資金を守る、侍大将の真壁六郎太(三船敏郎)だった。
228	9-10行目	姪・かつ子(山崎知子)の不幸と刺 <u>殺</u>	姪・かつ子(山崎知子)の不幸と刺 <u>傷</u>
349	3行目	<u>ゴーゴリ</u> の『どん底』は成功したとは	<u>ゴースト</u> の『どん底』は成功したとは
361	2行目	アンドラは本文中でサタジット・レイや侯孝賢らの黒澤 <u>へ</u> の影響にふれている。	アンドラは本文中でサタジット・レイや侯孝賢らの黒澤 <u>から</u> の影響にふれている。